

初期アビダルマ仏教における「我」の同義語について

齋 藤 滋

1. 問題の所在 『俱舍論』(*Abhidharmakośabhāṣya* 以下 *Akbh*) の「破我品」には、犢子部の「プドガラ (pudgala 補特伽羅)」が述べられている。著者である世親は犢子部を批判の対象にしているが、その批判の前提は以下の二点に纏められる。第一に、ブッダゴーサが述べているように、当時の仏教では、プドガラ (pudgala 補特伽羅)・アートマン (ātman 我)・サットヴァ (sattva 有情・衆生)・ジーヴァ (jīva 命者) という語は、いずれも人格の主体を表す術語として、承認されていたことがあげられる。第二に、これまでの研究によっても明らかにされているように¹⁾、犢子部の「プドガラ」は実在するものであり、たとえ非即非離蘊の「我」と犢子部が主張しつつも、その機能はインド哲学諸派が主張する我 (ātman) と極めて類似したものであったことがあげられる。

しかし、「プドガラ (pudgala)」等が「アートマン」と同義とされるのは、犢子部が部派として独立した後に確定したものにちがいない。なぜならば、「プドガラ」等が、「アートマン」と同義であることが部派分裂以前の仏教教団で承認されているのならば、一部派である犢子部は「プドガラ」という術語の使用を避けたはずである。それ故、「プドガラ」等の「アートマン」の同置は、部派分裂以降のアビダルマ仏教を特徴づけるものとなろう。

そこで、本稿では、初期のテキストに記述される「アートマン」の同義語である「プドガラ」等の術語をもとに、初期アビダルマ仏教の特質を明らかにしたい。

2. 『集異門足論』における同義語 説一切有部の論書で「プドガラ」等の同義語の列挙は『集異門足論』の「七識住」の所説に認められる。ここでは、第一識住から第七識住まで、有色・有情・種種身・種種想の四種について論じられるが、この中の、「有情」について、以下のように記述される。すなわち、

有情とは、諦義・勝義によって、諸有情は不可獲であり不可得であり無所有であり非現有であるけれども、蘊・界・處により有情を假立し、もろもろの、想・等想・施設・言説が展開する。謂わく、有情 (sattva)・人 (nara)・意生 (※ manuja ※ manuṣya)・儒童

(mānava)・命者 (jīva)・生者 (jantu)・養者 (poṣa)・士夫 (puruṣa)・補特伽羅 (puṭṭhaka) である。故に、有情と名づける²⁾。

と記述される。ここでは、有情の同義語として、①有情②人③意生④儒童⑤命者⑥生者⑦養者⑧士夫⑨補特伽羅が列挙されているが、これらの語は、五蘊・十八界・十二処に対し、假立されたものに過ぎず、語の指示対象が実在しているわけではない。また、この記述中、プドガラ (puṭṭhaka 補特伽羅)・サットヴァ (sattva 有情)・ジーヴァ (jīva 命者) は同義とされているが、アートマン (ātman 我) について何も述べていない³⁾。

3. 『集異門足論』におけるプドガラ 『集異門足論』では、プドガラ (puṭṭhaka 補特伽羅)・サットヴァ (sattva 有情)・ジーヴァ (jīva 命者) は同義とされている。そこで、これらの語の中で、「プドガラ (puṭṭhaka 補特伽羅)」の語の用例を見てゆきたい。『集異門足論』では、三補特伽羅 (①覆慧補特伽羅 ②膝慧補特伽羅 ③広慧補特伽羅)⁴⁾、七補特伽羅 (①隨信行補特伽羅 ②隨法行補特伽羅 ③信勝解補特伽羅 ④見至補特伽羅 ⑤身証補特伽羅 ⑥慧解脱補特伽羅 ⑦俱分解脱補特伽羅)⁵⁾、八補特伽羅 (①預流果向 ②預流果 ③一來果向 ④一來果 ⑤不還果向 ⑥不還果 ⑦証阿羅漢果向 ⑧証阿羅漢果) があげられる⁶⁾。この三プドガラ・七プドガラ・八プドガラについては *Puggalapannati* にも言及されるものであるが⁷⁾、このプドガラは人格の主体という意味では使用されず、聖者等のヒトを意味するものである。さらに、『舍利弗阿毘曇論』には、合計七十五種のプドガラが列挙され、この中には聖者だけでなく「凡夫人」や「二眼人」等の表現もあり、広くヒト一般を意味する語としてプドガラが使用されている⁸⁾。それ故、説一切有部だけでなく、当時の仏教ではプドガラはヒト一般を意味する語であったといえる。従って、『集異門足論』等の初期の論書の「プドガラ」の語は、後代のアビダルマ仏教の見解と異なり、人格の主体であるアートマン (ātman 我) と明らかに異なったものといえる。

4. 『発智論』における同義語 『集異門足論』では、プドガラ等は、アートマンと異なった概念であったが、『発智論』の「迦執見」の箇所には次のように記述される。すなわち、

これについて、これが我、これが有情、命者・生者・養育者・補特伽羅・意生・儒童・作者・教者・生者・等生者・起者・等起者・語者・覚者・等受領者であって、過去にあらずというものでなく、未来にあらずというものでなく、それぞれの處で善悪の業をつくり、それぞれの處で結果の異熟を受ける。この蘊 (身体) を捨て、別の蘊 (身体) を

持続する、というこの（見解）は辺執見の常見に含まれ、見苦所断である⁹⁾。

とある。ここでは、①我 ②有情 ③命者 ④生者 ⑤養育者 ⑥補特伽羅 ⑦意生 ⑧儒童 ⑨作者 ⑩教者 ⑪生者 ⑫等生者 ⑬起者 ⑭等起者 ⑮語者 ⑯覺者 ⑰等受領者の十七の同義語が、辺執見の常見として列挙される。また、「我語取」に関する記述でも、①我 ②有情 ③命者 ④生者 ⑤能養育者 ⑥補特伽羅の六種の同義語が列挙される¹⁰⁾。プドガラ (pudgala 補特伽羅) 等の語とならび、アートマン (ātman 我) の語も含まれるため、アートマンはプドガラ等と同置されていることが明らかである。また、辺執見についての記述では、これら語の意味するものは、業の作者や異熟の受者という記述が認められるため、ここで述べられるアートマンやプドガラ等は明らかに人格の主体を意味するものである。それ故、説一切有部では、プドガラ等は人格の主体であるアートマンに結び付けられるという解釈の変化が起こったと理解される。

5. 『識身足論』のプドガラ論者 『発智論』の「辺執見」や「我語取」の箇所におけるプドガラ等とアートマンの同置には要因があるはずである。「辺執見」や「我語取」はいずれも説一切有部にとっては承認できないものである。それ故、これらの記述は、当時の説一切有部の批判対象にしていた者の主張とみなすことができる。ここでは説一切有部で『集異門足論』以降に作られたとされる『識身足論』の記述をみてみよう。『識身足論』では対論者であるプドガラ論者は以下の主張をする。

プドガラ論者は以下のような言説を主張する。我・有情・命者・生者・養育・士夫・補特伽羅はある。プドガラがあるので、諸業である順樂受〔業〕や順苦受〔業〕や順不苦不樂受〔業〕を作る¹¹⁾。

とある。この記述はアートマンがプドガラ等と同義として列挙されるだけでなく、これらが業の作者とされることから、『発智論』の記述との類似が認められる。従って、説一切有部のテキストに限定するならば、『発智論』のプドガラ等とアートマンとの同置は、『識身足論』のプドガラ論者の所説に影響されたものと考えられる¹²⁾。

6. アビダルマ仏教と大乘仏教 プドガラ等とアートマンとの同置は、所属部派は明確には解っていないが、『舍利弗阿毘曇論』にも認められる。『舍利弗阿毘曇論』では、①我想 (ātmasaṃjñā) ②衆生想 (sattvasaṃjñā) ③命想 (jīvasaṃjñā) ④人想 (pudgalasaṃjñā) が列挙される¹³⁾。それ故、プドガラ等とアートマンとの同置は、説一切有部だけに限定されたものでなく、アビダルマ仏教で起こった変化と

みなすことができる。

さらに、このブドガラ等とアートマンとの同置は、アビダルマ仏教のみならず、大乘仏教の經典にも認められる。例えば、*Vajracchedikā*（『金剛般若經』）には、

スプーティよ、なぜならば、彼ら諸菩薩摩訶薩には、アートマンという想い (*ātmasaṃj-nā*) はおこらない、サットヴァという想い (*sattvasaṃjñā*)・ジーヴァという想い (*jīvasaṃj-nā*)・ブドガラという想い (*pudgalasaṃjñā*) はおこらない¹⁴⁾。

とあり、①我想②有情想③命想④ブドガラ想の四種の同義語が列挙される。この列挙は『舍利弗阿毘曇論』のものと一致している。また、*Suvikrāntavikrāmiparipṛcchāprajñāpāramitāsūtra*（『善勇猛般若經』）には、

アートマン (*ātman*)・サットヴァ (*sattva*)・ジーヴァ (*jīva*)・ブドガラ (*pudgala*)・バーヴァ (*bhāva*)・アバーヴァ (*abhāva*) という想いと結合するのでもなく、分離するものでもない¹⁵⁾。

とあり、ここでも「アートマン (*ātman*)」と「サットヴァ (*sattva*)」と「ジーヴァ (*jīva*)」と「ブドガラ (*pudgala*)」の列挙が認められる¹⁶⁾。さらに、『大乘涅槃經』にも、「アートマン」や「ブドガラ」等の列挙が認められることが、先学の研究によって明らかにされている¹⁷⁾。

以上のことから、般若經典等の大乘經典にも、アビダルマ仏教内のブドガラ等とアートマンとの同置が影響を与えているといえよう。

7. 結語 本稿では、アビダルマ仏教における「我」の同義語をとりあげ、これらの同義語と「我（アートマン）」との関係にもとづき考察をしたところ、以下のことが明らかになった。

まず、『集異門足論』にみられるように、初期のアビダルマ仏教では、「ブドガラ」・「サットヴァ」・「ジーヴァ」等は假立された「ヒト一般」を意味し、人格の主体である「我（アートマン）」と異なったものであった¹⁸⁾。しかし、『発智論』になると、『識身足論』のブドガラ論者の影響を受け、「ブドガラ」等は「我（アートマン）」と同置され、人格の主体を意味するようになる。また、この同置は、『舍利弗阿毘曇論』にも見出すことができる。従って、ブドガラ等とアートマンの同値は初期アビダルマ仏教を特徴づけるものである。さらに、大乘仏教の起源となった部派は特定できないが、『金剛般若經』等の大乘經典における同義語の列挙においても、「ブドガラ」等と「我（アートマン）」の同置の影響を見出すことができる。

1) 犢子部のブドガラ論については、三友健容 (1971) 「ブドガラ輪廻論と有部業論との一考察」『大崎学報』第 126・127 号: pp. 299-312, 櫻部建 (1976) 「俱舍論における我論——破我品の所説——」中村元編『自我と無我』平楽寺書店: pp. 455-478, 武田宏道 (1998) 「犢子部のブドガラ説——『俱舍論』破我品の所説を中心に——」『龍谷大学論集』451: pp. 1-35 等の多くの研究がすでにある。2) 『集異門足論』巻 17, T. 26, 437, c, 27-438, a, 2: 有情者, 謂諦義勝義, 雖諸有情不可獲不可得無所有非現有。而依蘊界處假立有情。諸想等想施設言説轉, 謂有情人意生儒童命者生者養者士夫補特伽羅。故名有情。なお, サンスクリットについては, *Akṛbh*・玄奘訳『俱舍論』・真諦訳『俱舍釈論』の比類される記述にもとづき想定をした。*Akṛbh* では「atreyam samjñā sattvo naro manuṣyo mānavāś ca poṣaṇ puruṣaṇ pudgalo jīvo jantur iti. (*Akṛbh*, Pradhan 1st ed., 465, 12-13)」とあり, また, 玄奘訳『俱舍論』では「即於此中隨義差別假立名想。或謂有情不悅意生儒童養者命者生者補特伽羅。 (『俱舍論』巻 29, T. 29, 154, a, 28-b, 1)」とあり, 真諦訳『俱舍釈論』には「於此中立諸名。謂薩埵那羅摩 閼摩那婆弗伽羅時婆布灑善斗。 (『俱舍釈論』巻 22, T. 29, 305, c, 17-18)」とある。3) なお, 『集異門足論』巻 5 の「三欲生」の記述や『集異門足論』巻 19 の「九有情居」び記述にも同種の同義語が列挙される。4) 『集異門足論』巻 4, T. 26, 379, c, 29-380, a, 1。5) 『集異門足論』巻 16, T. 26, 435, b, 15-18。6) 『集異門足論』巻 18, T. 26, 441, a, 13-17。7) *Puggalapannati* には, 三ブドガラについては「avakujjapaṇño puggalo, ucchaṇṇa paṇño puggalo, puthupaṇño puggalo. (*Puggalapannati*, P. T. S., p. 4)」とあり, セブドガラについては「ubhatobhāgavimutto, paṇṇāvimutto, kāyasakkhī, ditṭhipatto, saddhāvimutto, dhammānūsārī, saddhānūsārī. (*Puggalapannati*, P. T. S., p. 10)」とあり, ハブドガラについては「cattāro maggasamaṅgino cattāro phalasamaṅgino puggalā. (*Puggalapannati*, P. T. S., p. 10)」とある。8) 『舍利弗阿毘曇論』巻 8, T. 28, 584, c, 18-585, a, 6。9) 『發智論』巻 20, T. 26, 1028, b, 10-15: 此是我是有情命者生者養育者補特伽羅意生儒童作者教者生者等生者起者等起者語者覺者等受領者, 非曾不有。非不当不有, 於彼彼處造善惡業, 於彼彼處受果異熟, 捨此蘊統余蘊。此辺執見常見提, 見苦所斷。なお, 『八鍵度論』の対応箇所には, 同義語の列挙はされない。 (『八鍵度論』巻 30, T. 26, 914, a, 11-13: 所謂此見此我。若語若覺作教作生等生。於彼彼作善惡行受報。此辺見有常見説苦諦斷也。)。10) 『發智論』巻 2, T. 26, 924, b, 21-23。なお, 『八鍵度論』の対応箇所では, ①己身②衆生③人④寿命の四種の同義語が列挙される。 (『八鍵度論』巻 2, T. 26, 778, c, 24-25: 外道異學不施設斷我受。答曰。外道異學長夜著己身者衆生著人著寿命。)。11) 『識身足論』巻 3, T. 26, 542, b, 6-8: 補特伽羅論者作如是言。有我有情命者生者養育士夫補特伽羅。由有補特伽羅故。能造諸業。或順樂受。或順苦受。或順不苦不樂受。なお, この箇所については, 三友前掲論文 [pp. 300-301] と武田前掲論文 [p. 27] にすでに言及される。12) なお, ブドガラ論者の詳細は不明であるが, 武田前掲論文では, この記述中の「作業」というブドガラの作用が *Akṛbh* や『成実論』の犢子部の主張にも認められるとする。13) 『舍利弗阿毘曇論』巻 13, T. 28, 616, b, 21-23: 若有我想衆生想命想人想, 無有是處。常応第一空行。14) *Vajracchedikā*, Conze ed., 31, 14-17: na hi subhūte teṣāṃ bodhisattvānāṃ mahāsattvānāṃ ātmasamjñā pravartate na sattvasamjñā na jīvasamjñā na pudgalasamjñā pravartate。羅什訳『金剛般若波羅蜜經』T. 8, 749, b, 4-5: 是諸

衆生無復我相人相衆生相寿者相. 15) *Suvikrāntavikrāmiparipṛcchāprajñāpāramitāsūtra*, Hikata ed., 108, 13-14: n' ātma-satva-jīva-pudgala-bhāva-abhāvasamjñayā saṃyujyate na viśaṃyujyate. なお、対応する漢訳には「不与我有情命者生者養者士夫補特伽羅意生儒童作者受者知者見者有無有想若合若離。」とある。（『大般若波羅密多經』卷 599, T. 7, 1104, a, 22-24). 16) なお、「バーヴァ (bhāva)」と「アバーヴァ (abhāva)」が併記される理由は不明である。

17) 幅田裕美 (1990) 「大乘〈涅槃經〉におけるアートマン論」『印度哲学仏教学』第 5 号: pp. 173-190. なお、『大乘涅槃經』中の同義語については、漢訳とチベット訳で同義語の異同が著しい。18) 本稿では「プドガラ (pudgala 補特伽羅)」の単独の使用例として『集異門足論』・『舍利弗阿毘曇論』・*Puggalapannati* の記述をみた。列挙されることなしに、「サットヴァ」・「ジーヴァ」等が単独で使用された場合の語の指示対象については、今後更に検討を加えたい。

(本稿は、平成 17 年度科学研究費補助金 (特別研究員奨励費) の成果の一部である。)

〈キーワード〉 ātman, pudgala, 大乘仏教, 般若経

(日本学術振興会特別研究員 博士 (文学))

掲載されなかった諸氏の発表題目 (2)

『釈軌論』の『勝義空性経』『転有経』解釈

堀内 俊郎 (東京大学大学院)

『具舍論』の samjñā (想) について

飯岡 祐保 (東京大学大学院修了)

滅尽定について

池田 練太郎 (駒澤大学)

180. The Etymological Meaning of 'pāramitā'

Rishō HOTORI

There have been three main etymological explanations of the important term 'pāramitā' in the *Prajñāpāramitā* literature among scholars, ancient and modern.

(1) pāram + i (< √i) + tā [to go to the further shore]

(2a) pāram + ita (pp. < √i) + tā ; (2b) pāram + ita (pp. < √i) > f.
[gone to, arrived at, reached the further shore]

(3a) pārami (f. < parama) + tā ; (3b) pārami (< parama + in) + tā
[highest state, perfection, completeness]

But such all meanings are not suitable for the *Prajñāpāramitā*'s context. According to the *Aṣṭasāhasrikā PP*, 'prajñā-pāramitā' is 'mahāyāna' which is a huge vessel leaving here for the goal. Therefore pāramitā indicates having the process to go through, and is not concerned with the goal only. The above meanings of 'pāramitā', (2) and (3), seem without any application to the real 'pāramitā' in that context.

In the *Mahāprajñāpāramitāśāstra* (大智度論) there is the etymology, 波羅 (pāra) + 蜜 (mi[-tā]). This is probably [pāra + mi (< √mā , to measure; to pass over) + tā]. [pāra + mi] is a vessel (ship) for passing over to the further shore. And according to Paramārtha's (真諦) translation of the *Abhidharmakośabhāṣya*, [-tā] of 'pāramitā' seems a collective suffix [Pāṇini, 4.2.43], not an abstract suffix.

Then 'pāramitā' must be a fleet of vessels passing over to the further shore, and in the context of the six pāramitās (dāna- p. etc.) 'pāramitā' is a metaphor for the six from 'dāna' to 'prajñā'.

181. The Synonyms of *Ātman* in Early Abhidharma Buddhism

Shigeru SAITŌ

This paper aims to clarify some particulars of early Abhidharma Buddhism based on a consideration of the synonyms of *ātman*. Vasubandhu

states in the *Abhidharmakośabhāṣya* that the *ātman* is equated with *pudgala*, *jīva*, *sattva*, etc. In the early stage of Abhidharma Buddhism, these terms represented the person as a provisional designation and as being distinct from the *ātman*. After that, in the *Jñānaprasthāna*, they became synonymous with *ātman* under the influence of the Pudgalavādins. This identification of the *ātman* and those terms should be thought of as a surprising change in the history of Buddhist thought which denied the *ātman*. Moreover, this identification also influenced Mahāyāna Buddhism.

182. *Samāropa* and *Apavāda* in the Doctrine of the Three Self-natures

Noriaki AZAMI

In this paper, I study the doctrine of the Three Self-natures (*trisvabhāva*) in the philosophy of Consciousness-only, and focus more particularly on *samāropa* (*sgro 'dogs pa* 増益) and *apavāda* (*skur pa 'debs pa*, 損減). In the doctrine of Consciousness-only, *samāropa* means 'to see something in the non-existent'. According to the Yogācāra school, *samāropa* and *apavāda* are frequently mentioned in commentaries on emptiness. The Yogācāra school stresses the importance of the fact that these two notions should be used in the commentaries on the Three Self-natures. This paper examines several commentaries dealing with the relationship between *samāropa* and *apavāda* and the Three Self-natures in order to better understand this relationship.

183. On the *Śālistambasūtra* in the *Tattvasaṃgrahapañjikā*

Shinsei FUJII

The following expression of the *Śālistambasūtra* (ŚSS) *sa ca ayam añkura svayaṃ kṛto - nāpyahetuḥ samutpanna* (A1) is quoted in the avayavārtha of Kamalaśīla's *Tattvasaṃgrahapañjikā* (TSP) GOS [I1:1-2] (B) [I3:18-19]. ŚSS contains a phrase similar to (A1) in its adhyātmika - pratīyasamutpāda, *nāmarūpāṅkuro svayaṃkṛto* (A1). In this thesis I intend to investigate Kamalaśīla's quotation of ŚSS in TSP.